
現代の欧州諸国における移民の言語

その評価の二重性を追って

田中 翔太

1. はじめに¹⁾

1.1. 研究の背景

ドイツは移民国家である。しかしドイツ政府は2000年代まで「移民国家」である事実を否認し続け、2005年の「新移民法」施行まで、長いあいだ移民に対する社会的対策を講じずきた。そのため移民に対する教育面での政策は、いまだに多くの問題を抱えている。ドイツに暮らす移民の中でも最大のグループであるのが、トルコ系移民である。旧西ドイツは1961年にトルコと労働力に関する協定を結び、そこから多くの外国人労働者たちが旧西ドイツへと渡り、後に祖国に残してきた家族を呼び寄せて定住した。また1970年代になるとクルド紛争等の政治的な理由から、亡命者がドイツへとやって来た。彼らが話すドイツ語は渡独当初、ドイツ社会から問題視されてきた。しかしトルコ系移民の世代は今日では第三世代へとなり、彼らの話すドイツ語をめぐる状況も1990年代半ば以降に変化してきた。その変化の大きな流れが、以下の2点である。

- (1) これまで移民背景を持たないドイツ人から「ブロークンなドイツ語」(Androutsopoulos 2001: 330)と見なされてきたトルコ系移民の話すドイツ語が、現在では一部のドイツ人の若者からも話されるようになった。
- (2) またトルコ系移民の話すドイツ語は、一部のドイツ人の若者から「クールなことば」としてポジティブな評価を獲得し始めるようになる。

1) 本論文は、日本学術振興会特別研究員PD(課題番号26・10205)としての研究成果の一部である。ここに記し、日本学術振興会に謝意を表する。

ここでひとつの疑問が生じる。それは、移民背景を持つ者が話す言語²⁾が移住先の社会から受容され使用されるのは、ドイツ国内のみで観察される現象なのだろうか。ポツダム大学の言語学者である Heike Wiese はこの点に関して、次のように述べている。

Kiezdeutsch³⁾は、ドイツだけの孤立した現象ではない。類似した変種が成立しているということは、ヨーロッパ全土の移民の割合が多い都市部において、ここ数十年のあいだに観察されている。(Wiese 2006: 252)

つまり Kiezdeutsch のように様々な移民背景を持つ者の話す言語が、移民背景を持たない者、すなわち土着の人物からも話されるという現象が、ヨーロッパ全土で起こっているという主張である。

1.2. 問題提起

この Wiese (2006) の言説に依拠して、本論文では次の2点を考察していく。

- (A) 欧州諸国で移民背景を持つ者が話す言語は、移民背景を持たない人物の中でも特にどのような社会的集団に属する者によって、どのような目的で話されているのか。
- (B) 移民背景を持つ者の言語を話す移民背景を持たない者は、移民背景を持つ者の言語をどのように評価し、またどのような理由からその評価を与えるのか。

2) 当論文で扱う「移民背景を持つ者が話す言語」とは、移民先の社会で話されている言語のことである。すなわちドイツの場合は移民背景を持つ者が話すドイツ語、オランダの場合は移民背景を持つ者が話すオランダ語を指す。

3) 2006年にHeike Wieseは、*„Ich mach dich Messer“: Grammatische Produktivität in Kiez-Sprache („Kanak Sprak“)*という論文を発表し、その中でKiezdeutsch (Kiez-Sprache)という概念を提唱した。Kiezdeutschとは、「移民が多い都市の住宅地区で形成された若者ことばの変種」(Wiese 2006: 247)であり、「第二言語習得、民族方言、若者ことばと関連を持つ」(同: 246)。すなわち、移民の多い都市部で、移民背景を持つ若者と持たない若者両方から話される、移民の言語の要素を持つ言語のことである。Kiezdeutschの言語要素は語彙に限らず、移民背景を持たない若者が、移民背景を持つ者が話すドイツ語の発音や文法を話すという例が観察されている(Wiese 2006, 2012を参照)。すなわちKiezdeutschは、トルコ系移民のように特定の民族背景に限定されず、アラビア系移民やクルド系移民といった、多様な民族背景を持つ若者が話すドイツ語のことを指す。

か。

以上の点を、移民背景を持たない人物の視点から明らかにしていく。

2. 欧州諸国における移民が話す言語

欧州諸国の都市部では、様々な民族背景を持つ者が高い割合で暮らす地区（ベルリンのクロイツベルクやノイケルン⁴⁾、ストックホルムのリンケビー等）が存在する。日常生活において移民背景を持つ者と接触する機会の多いこうした欧州諸国の都市部では、移民背景を持つ者の話す言語が移民背景を持たない者によって話されるという現象⁵⁾が起こっている。次に示す表1は、欧州諸国における同現象をまとめたものである。

本章ではヨーロッパ各国における同現象について、1) 話者、2) 話される場所、3) 同言語の特徴、4) 移民の言語が移民背景を持たない者によって話される目的に分けて提示していく。

表 1: 移民背景を持つ者の言語が移民背景を持たない者によって話される事例

国名	名称
オランダ	「ストリート言語 (Straattaal)」 (Appel 1999) ⁶⁾
ノルウェー	「ケバブ・ノルウェー語 (Kebabnorsk)」 (Aasheim 1995)
スウェーデン	「リンケビー地区のスウェーデン語 (Rinkebysvenska)」 (Kotsinas 1992)
デンマーク	「コペンハーゲンの多民族方言 (Københavnsk multietnolekt)」 (Quist 2000)
イギリス	「多文化英語 (Multicultural English)」 (Fox/Khan/Torgersen 2011)

4) 例えばベルリンのクロイツベルクは人口 27 万 4630 人に対して、移民背景を持つ者の人口が 10 万 5374 人に上り、総人口のおよそ 38%が移民背景を持つ者という計算になる。またノイケルンは 32 万 3828 人の人口の中で、移民背景を持つ者が 13 万 4599 人おり、全体の約 42%が移民背景を持つ者である (Amt für Statistik Berlin-Brandenburg 2014: 12 を参照)。

5) 本論文で扱うのは、不特定の民族背景を持つ移民たちが話す話しことばを、移民背景を持たない土着の人物が話すという現象である。すなわち書きことばについては除外する。

6) 括弧内の人物が、それぞれの概念を最初に学術誌上で提唱した。なお、各呼称の日本語訳は筆者による試訳である。

2.1. ストリート言語 (Straattaal)

まずは、オランダで観察された「ストリート言語 (Straattaal)」である。同概念は、Appel (1999) によって初めて提唱された。話し手は、「オランダ人と土着でない人物の、中等学校に通う 12 歳から 18 歳の若者」(Nortier 2001: 61) であり、同言語は、オランダのアムステルダムにおいて観察されている。同言語の特徴は、オランダ語やスリランカ語、英語、アラビア語といった複数の言語の要素を含んでいる点である (同: 61 を参照)。「ストリート言語」と呼ばれる同言語の使用は、「大人や部外者がいない、打ち解けたグループ内でのみ起こる。そして時折、仲間内での隠語として使用され」(同: 61) ている。

表 2: 「ストリート言語 (Straattaal)」の条件 (Nortier 2001 を基に筆者作成)

1) 話者	12 ~ 18 歳の、オランダ人及び土着でない若者
2) 場所	アムステルダム
3) 言語的特徴	オランダ語、スリランカ語、英語、アラビア語等の要素を含む。
4) 目的	時折、隠語として使用する。

2.2. ケバブ・ノルウェー語 (Kebabnorsk)

次に見るのが、ノルウェーで観察された「ケバブ・ノルウェー語 (Kebabnorsk)」と呼ばれる言語である。この概念は、Aasheim (1995) により初めて学術誌で取り上げられた。Aarsæther (2010) は「同現象は話者が 20 代に入る前に終わる」(Aarsæther 2010: 122) とし、「移民背景を持つ者と持たない者の両方が話す」(同: 122) としている。観察された場所はノルウェーの首都オスロ⁷⁾で、同言語は「多民族方言の若者ことば」(同: 118) である。「ケバブ・ノルウェー語」の話者は、多様な民族の要素を含んだ若者ことばを話すことで、「彼らの暮らす地域に対するコミュニティ感情を表現」(同: 120) するとしている。例えば Aarsæther (2010) は、オスロの東部地域でインフォーマントが、「多様な民族からなるこの若者ことばを、[...] 東部地域出身の若者としてのアイデンティティを構成するための、言語的な標識」(同: 118f.) と見なしていたと述べている。

7) オスロは「1970 年代以降、次第に多民族からなる都市へとになっていき」(Aarsæther 2010: 112)、現在は市内人口の「26%が移民背景を持つ者である」(同: 112)。

表 3: 「ケバブ・ノルウェー語 (Kebabnorsk)」 の条件
(Aarsæther 2010 を基に筆者作成)

1) 話者	20 代前までの、ノルウェー人及び他の移民背景を持つ若者
2) 場所	オスロ
3) 言語的特徴	多民族方言の若者ことば
4) 目的	居住地区出身者としてのアイデンティティを示すため。

しかしながら移民背景を持たない者による「ケバブ・ノルウェー語」の受容に関しては、評価の二重性という興味深い現象が生じている。「ケバブ・ノルウェー語」は 2000 年頃に、「一般の人々により、今日よりもポジティブな含意を持たれていた」(同: 123)。その理由は、「同言語が創造性や言語学的な革新に結びつけられていた」(同: 123) からである。しかし同言語は今日、「ジャーナリストや学術的な職業に携わる者から、『悪いノルウェー語』を話すことに結びつけられている」(同: 122)。こうした評価の二重性は、ドイツにおける移民背景を持つ者が話すドイツ語にもみられる現象である⁸⁾。

2.3. リンケビー地区のスウェーデン語 (Rinkebysvenska)

続いては、同じく北欧のスウェーデンで観察された言語現象である。Kotsinas (1992) が学術誌で、スウェーデンの首都ストックホルム郊外にあるリンケビー地区⁹⁾で話されている言語を「リンケビー地区のスウェーデン語(Rinkebysvenska)」と初めて呼んだ。この言語は「依然として主に移民背景を持つ者の隠語であるが、同地区に住むスウェーデンの民族背景を持つ若者も、同言語に関して完全に熟達している」(Stroud 2004: 199)。「リンケビー地区のスウェーデン語」の言語的特徴としては、「『外国語のように聞こえる』特有の音韻」(同: 199) を持ち、トルコ語、アラビア語、スペイン語といった「多くの異なる言語からの借用語」(同:

8) 移民の話すドイツ語に対する移民背景を持たない者からの評価は、入り組んでいる。言語学者の中には移民の話すドイツ語をノルウェーと同様に「言語的革新を持つ」現象と捉える者もいる一方で、言語学者や学校教育関係者、ジャーナリストによっては、「悪いドイツ語」と見なす者もいるのだ(田中 2012: 90ff. を参照)。

9) リンケビー地区は、スウェーデンの中でも移民背景を持つ者の割合が非常に高い地区である。2014 年の統計では、同地区の人口 4 万 8838 人中、移民背景を持つ者の数は 3 万 9445 人に上り、実に総人口の 80% 以上が移民背景を持っている(Statistik om Stockholm を参照)。

199) も見られる。そして話者は同言語を、「グループアイデンティティの標識として」(Aarsæther 2010: 114) 使用している。

表 4: 「リンケビー地区のスウェーデン語 (Rinkebysvenska)」 の条件

(Stroud 2004/ Aarsæther 2010 を基に筆者作成)

1) 話者	10 代のスウェーデン人と、移民背景を持つ若者
2) 場所	ストックホルム郊外のリンケビー地区
3) 言語的特徴	- 「外国語のように聞こえる」 特有の音韻 - トルコ語、アラビア語、スペイン語等からの借用語
4) 目的	グループアイデンティティの標識として。

2.4. コペンハーゲンの多民族方言 (Københavnsk multietnolekt)

次に見るのは、Quist (2000) がデンマークで観察した「コペンハーゲンの多民族方言 (Københavnsk multietnolekt)」である。同言語の話者の民族背景についても、オランダやノルウェー、スウェーデンの現象と類似している。Quist (2008) は同言語が、「(デンマークの民族背景も含めた) 異なる民族背景と異なる第一言語 (トルコ語、ソマリア語、デンマーク語、アラビア語、セルビア語) を持つ話者」(Quist 2008: 49) によって話されるとしている。話者の居住地は、デンマークの首都コペンハーゲンである。そして同言語もまた、形態、統語、語彙の面でその言語的特徴が観察されている。例えば語彙の面では、「トルコ語やアラビア語、クルド語やセルビア語からの、20 から 30 の借用語」(同: 47) が存在し、「そのほとんどの語彙が、タブーやスラングであるか、強意語や談話標識として使用」(同: 47) されている。使用する目的も欧州諸国の他の言語現象と類似しており、「若者が自らのアイデンティティを築き上げるため」(Aarsæther 2010: 114) に同言語を話すという。

表 5: 「コペンハーゲンの多民族方言 (Københavnsk multietnolekt)」の条件
(Quist 2000/ Aarsæther 2010 を基に筆者作成)

1) 話者	デンマーク人及び他の移民背景を持つ若者
2) 場所	コペンハーゲン
3) 言語的特徴	トルコ語やアラビア語、クルド語やセルビア語からの、20 から 30 の借用語
4) 目的	使用することにより、話者のアイデンティティを構築する。

2.5. 多文化英語 (Multicultural English)

最後に見るのが、Fox/Khan/Torgersen (2011) による「多文化英語 (Multicultural English)」である。同言語もこれまで見た他の欧州諸国における現象と同様に、「英語のモノリンガル話者を含めた、異なる民族背景を持つ」(Fox/Khan/Torgersen 2011: 20)、とりわけ「若者たち」(同: 19) から話されており、場所は「ロンドンやバーミンガム」(同: 19) といった、イギリスの都市部で観察されている。「多文化英語」についても、例えばバングラデシュやパキスタン、アフリカ系やカリブ海諸島といった「異なる民族の変種」(同: 20) が混在している。同言語は若者から、「自らが特定のコミュニティに属しているという感覚を持つため」(同: 42) に話されている。

表 6: 「多文化英語 (Multicultural English)」の条件
(Fox/Khan/Torgersen 2011 を基に筆者作成)

1) 話者	イギリス人及び他の移民背景を持つ若者
2) 場所	ロンドン、バーミンガム
3) 言語的特徴	バングラデシュやパキスタン、アフリカ系やカリブ海諸島といった、異なる民族の変種が混ざっている。
4) 目的	特定のコミュニティに所属しているという感覚を持つため。

2.6. 各国で若者から受け入れられた移民の言語に関する共通点

本章では、ヨーロッパの各国において、移民背景を持たない者から移民背景を持つ者の言語が話される例を見てきた。ここで各国の言語に複数の共通項があることが明らかとなった。それはまず、移民背景を持つ者の言語を話すのは、移民背景を持たない者の中でも若者であるという点だ。さらに彼らは皆、都市部の移

民背景を持つ者が多く暮らす地区で生活している。このことから、日常生活において普段から移民背景を持つ若者と直接的に接触する機会のある若者が、言語接触を通して移民背景を持つ若者のことばを使用するようになっていることが分かる。つまり移民背景を持つ者と同じ空間で生活する者同士でその言語を話しているということだ。その際に、例えばトルコ系移民やアラビア系移民といった特定の「民族性」が薄れた、多様な言語の要素が混合している。

では、移民背景を持たない若者が同言語を話す動機は何か。共通して繰り返して出てきたのは、若者が同言語を使用することにより、自らの帰属意識やグループとしてのアイデンティティを示すためであるという点だ。Clyne (2000) は移民背景を持たない若者が移民背景を持つ者の言語を共有する目的として、「新たなグループアイデンティティを表現」(Clyne 2000: 87) するためだとしている。また La Page/Tabouret-Keller (1985) によるとこのような言語的振る舞いは、「個人的なアイデンティティと自らの社会的役割の探求という両方を示す、一連のアイデンティティ行為として見られている」(La Page/Tabouret-Keller 1985: 14)。そこには、ノルウェーのオスロで見られたような同じ地区の出身者としての対地域的な視点での仲間意識、あるいはオランダのアムステルダムで観察されたように、民族背景は違うが、対大人で見たときに同じ若者としての仲間意識が根底にあるのではないだろうか。そのことを示すための標識として同言語を使用することが、ひとつの理由として考えられる。

3. 模倣される移民の言語

Wiese (2006) が主張するように、ドイツ以外のヨーロッパの国々においても、移民背景を持つ者と共に生活する移民背景を持たない都市部の若者によって、移民背景を持つ者の言語が受容されつつあり、日常生活で使用されているということが明らかになった。

しかし他方で、日常生活において移民背景を持つ者と比較的関わりの少ない人物、つまり移民背景を持つ者と直接的な接触が少ない人物からも、移民背景を持つ者の話す言語が模倣されるという事例が見られた。次の表7が、移民背景を持つ者と日常生活において直接的な接触がないにもかかわらず、移民背景を持たない者により模倣される、移民背景を持つ者の言語である。

表 7: 移民背景を持つ者の話す言語が移民背景を持たない者から模倣される事例
(日本語訳は筆者による試訳)

国名	名称
オランダ	「似非モロッコ・トルコ語 (Murks)」 (Nortier 2001)
スウェーデン	「リンケビー地区の似非スウェーデン語 (Mock Rinkeby Swedish)」 (Stroud 2004)

本章でも、ヨーロッパ内各国におけるこの模倣現象を、話し手の視点から考察していく。なお各言語について、1) 模倣する話者、2) 模倣される言語の本来の話者、3) 模倣される同言語の特徴、4) 同言語が模倣される目的に分けて提示していく。

3.1. 似非モロッコ・トルコ語 (Murks)

まず示すのは、オランダで観察された「似非モロッコ・トルコ語 (Murks)」という言語である。Murks とは Moroccan 「モロッコ語」と Turkish 「トルコ語」を併せた造語であり、本来「似非」というニュアンスは含まれていない。しかしここでは理解しやすくするために、便宜的に「似非モロッコ・トルコ語」と訳した。同言語は、「日常生活において他の民族背景を持つ者との接触が比較的少ない」(Nortier 2001: 65)、「ネイティブのオランダ人少年少女のあいだでのみ使用される」(同: 65)と定義づけられている。2.1 で挙げたオランダにおいて話される「ストリート言語 (Straattaal)」には、スリランカ語やアラビア語、英語といった様々な外国語の要素が組み込まれていた。しかし「似非モロッコ・トルコ語」については、「モロッコ系移民が話すオランダ語のひどい訛りや、[...] トルコ系移民が話すオランダ語がステレオタイプ的に模倣される」(同: 65)。その際に模倣される「もっとも典型的な特徴は、イントネーションと発音」(同: 66)であるとされている。また、移民背景を持たない少年少女が同言語を模倣する際に、模倣する者の性別によってもその目的が異なるようだ。「少年たちが同言語を模倣する際は、タフに聞こえるため、あるいはモロッコ系移民が持つ(あまり良くない)イメージを真似るため」(同: 65)であり、他方で少女たちが模倣するのは、「大方ふざけて真似る」(同: 65)となされている。

表 8: 「似非モロッコ・トルコ語 (Murks)」の条件 (Nortier 2001 を基に筆者作成)

1) 話者	移民背景を持たないネイティブのオランダ人少年少女 他の民族背景を持つ者との接触が比較的少ない
2) 本来の話者	モロッコ系、トルコ系移民
3) 言語的特徴	モロッコ系、トルコ系移民が話すオランダ語の主にイントネーションや発音を、ステレオタイプの模倣する。
4) 目的	- 少年の場合はタフに聞こえ、モロッコ系移民が持つ (あまり良くない) イメージを真似るため。 - 少女の場合は、ふざけて真似る。

ここで、同じくオランダで見られた「ストリート言語」とは、話者の動機が大きく異なることが分かる。「ストリート言語」の場合、移民背景を持つ者と共に暮らす若者が「仲間意識」のために使用していたのに対し、「似非モロッコ・トルコ語」の目的はあくまで「ふざけて」面白おかしく真似をするだけであり、移民背景を持つ者に対する心的な距離が存在する。さらに「模倣」という語からも、この「モロッコ・トルコ語」とは本物ではない、いわば「偽物」の域を出ない、疑似的な言語であることが分かる。

3.2. リンケビー地区の似非スウェーデン語 (Mock Rinkeby Swedish¹⁰⁾)

次に見るのが、スウェーデンにおいて移民背景を持たない者が、移民背景を持つ者の言語を模倣する現象である。同言語は、Stroud (2004) により「リンケビー地区の似非スウェーデン語 (Mock Rinkeby Swedish)」と名づけられた。模倣する話者は、移民背景を持たないスウェーデン人の若者である。模倣される際の言語的特徴として、「ステレオタイプの音韻」(Stroud 2004: 203) や「軽蔑的かつ攻撃的な語」(同: 203) の使用、「下品な表現やタブーとなっている語の使用」(同: 203) が挙げられている。

では、なぜ「リンケビー地区の似非スウェーデン語」は使用されるのだろうか。Stroud (2004) は模倣する目的として、幾つかの可能性を提示している。典型的な例としては「移民背景を持つ者が話すスウェーデン語をパロディ化する」(同:

10) 類似した言語に、「似非スペイン語 (Mock Spanish)」と呼ばれるものがある。これはアメリカの人類学者・言語学者である Jane H. Hill (2001) が唱えたもので、アメリカにおいてスペイン系移民が話す英語のことを指す。人種差別となりうるが話者はそのことに気づいていないと指摘している (Hill 2001: 94f. を参照)。

202) ためという理由が挙げられているが、他にも例えば同言語を使用する者は、「人種差別の目的があり」(同: 203)使用することもあるとしている。この時点で、「グループアイデンティティの標識として」(Aarsæther 2010: 114) 使用されていた「リンケビー地区のスウェーデン語」と、話者の動機が大きく違うことが分かる。

表 9: 「リンケビー地区の似非スウェーデン語 (Mock Rinkeby Swedish)」の条件
(Stroud 2004/ Källström 2011 を基に筆者作成)

1) 話者	移民背景を持たないスウェーデン人の若者
2) 本来の話者	移民背景を持つ者
3) 言語的特徴	ステレオタイプ的な音韻や、攻撃的な語、下品な表現の使用
4) 目的	- 移民背景を持つ者が話すスウェーデン語をパロディ化するため。 - 人種差別のため。

3.3. 両似非言語の共通点

本章では、移民背景を持たない若者が移民背景を持つ若者の話す言語を模倣する事例を観察してきた。ここで、両「似非」言語に幾つかの共通点があることが分かる。

まずは、模倣をする話者である。2章で扱った言語が同じ地域に暮らす移民背景を持つ者と持たない者の両方から話されていたのに対し、「似非言語」として模倣される場合は、日常生活において移民背景を持つ者と直接的な接触が少ない人物から話されている。模倣する話者は移民背景を持つ者との接点と比較的少ないため、ひとつの可能性として、メディア (TV や音楽、雑誌や新聞等) を通して移民背景を持つ者の言語と間接的に接触していると考えられる。

次に模倣される言語的特徴についても、共通した点がある。それは両言語とも、発音やイントネーションに幾つかの語彙を混ぜた、単純なレベルにおける模倣という点である。さらに模倣される際に、両言語ともステレオタイプ化という段階を経ている。すなわちここで、移民背景を持つ者が話す言語を模倣する人物は、同言語に対してごく限られた知識しか所有していないということが分かる。

また移民背景を持つ者の言語を模倣する者が、移民に対して特定のイメージを所有していることも分かった。例えばオランダ人の少年たちが「似非モロッコ・

ドイツ語」を模倣する際に、モロッコ系移民のオランダ語は「タフに聞こえ、モロッコ系移民が持つ（あまり良くない）イメージ」（Nortier 2001: 65）を真似るためと理由を述べていた。さらに「リンケビー地区の似非スウェーデン語」を模倣する者も、「軽蔑的かつ攻撃的な語」（Stroud 2004: 203）や「下品な表現やタブーとなっている語」（同：203）を使用しているところから、彼らの移民背景を持つ者に対する印象が見て取れる。さらに「リンケビー地区の似非スウェーデン語」の場合は、「人種差別」（同：203）というキーワードも出てきた。ここでも、日常生活で接触のない「異なる存在」である移民との心的距離が根底にあると考えることができる。

4. なぜ移民の言語は模倣されるのか

4.1. 歴史において「役割語¹¹⁾」化された移民の話す言語—「アルヨことば」

では、なぜ移民背景を持つ者の言語が、移民背景を持たない者によって模倣されるのだろうか。その理由を紐解くために、本章では言語の「模倣」という現象を、金水（2003）による「役割語」の観点から説明していくことを試みる。

まずは歴史的に見て、移民背景を持つ者の言語がそれ以外の者から「役割語」化されてきた例を観察する。

4.1.1. 「アルヨことば」の歴史

その一例として、日本における「アルヨことば」が挙げられる。金水（2003）によると「アルヨことば」とは、「中国人風のなまった日本語表現」（金水 2003: 176）のことを指す。金水（2003）はアルヨことばの言語的な特徴として、次の3点を挙げている。

1. 文末述語に直接「ある」または「あるよ」（断定）、「あるか」（質問）が付く。まれに「あるな」などもある。ヴァリエーションとして、「あります」が付くこ

11) 役割語とは、「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを『役割語』と呼ぶ。」（金水 2003: 205）

ともある。

2. 文末述語動詞に「よろし (い)」を付けて、命令・依頼を表す。
3. 助詞「を」(ときに「が」も) がしばしば省略される (例「酒 \emptyset のむあるか」)。(同: 177f.)

金水 (2003) によると「アルヨことば」は、1870 年代後半にはすでに文献にあらわれたそうだ。「中国人コミュニティの中で用いられていた、ピジン日本語の一ヴァリエーションと見てよいであろう」(同: 191) とあるが、当時は中国人のみでなく、「西洋人の使用も記録されていた」(同: 195)。今日のような役割語としての「アルヨことば」は、「大正年間にはほぼ完成されていた」(同: 195) としている。

4.1.2. 当時の中国人に対する眼差し

「アルヨことば」が中国人のみと結びついた理由として、金水 (2003) は次のような根拠づけを行っている。「アルヨことば」は「戦前の、中国の人々に対する偏見に満ちたまなざしとともに用いられていた」(同: 203) という点である。すなわち「アルヨことば」とは金水 (2003) の言う「役割語の使用の中に、偏見や差別が自然に忍び込んでくる一面」(同: 203) を如実に描いたもので、「日本人がかつて持っていた中国人に対する [...] ステレオタイプの感情的な現れであった」(同: 181) のだ。「不完全な日本語＝ピジンしか話せないかのように描写され」(同: 203) ていた「アルヨことば」を通して、当時の日本人が中国人に対して抱いていた感情を読み解くことが出来るのだ。

4.2. 現代において「役割語」化しつつある移民の言語

ートルコ系移民のドイツ語

次に現代に視点を移し、移民の話す言語が現在進行形で「役割語」化しつつある事例を挙げる。

それはドイツにおけるトルコ系移民が話すドイツ語である。ドイツ国内では 2000 年代に、移民を扱うコメディ番組が流行した。これにより、それまでの日常生活において移民背景を持つ者とあまり接点のなかった層にまで、トルコ系移民

のドイツ語が波及したのだ。しかしコメディ番組で描かれるトルコ系移民のドイツ語は『ブロークンなドイツ語』のステレオタイプ」(Androutsopoulos 2001: 330)であり、現実世界で実際にトルコ系移民により話されるドイツ語には、必ずしも即してはいない。

例えばコメディ番組においてトルコ系移民役のコメディアンが使用するドイツ語は、ドイツ語の方言語法の土台に、幾つかのトルコ系移民のドイツ語に典型的とされる語彙を散りばめた、ごく表面的かつ限定的な事項にすぎないのだ(田中 2013 を参照)。

さらにトルコ系移民を演じるコメディアン¹²の服装についても、幾つかの共通点が見られる。コメディアンたちは帽子、あるいはチェーンネックレスを身につけ、革ジャンパーかジャージを着用しているのだ。髪型についても、複数のコメディアンが長髪を後ろでひとつに束ねているという共通点がある。つまり、コメディアンが演じるトルコ系移民の人物像の特徴に関しても、特定のグループに所属する人物を演じているという共通性が存在するのだ。

田中(2013)で分析対象としたコメディ番組におけるトルコ系移民の若者は、いわゆる「田舎ことば¹²⁾」を話し、服装もだらしない「無教養」で「粗野」な存在であった。この「トルコ系移民」像がコメディ番組という「ポピュラーカルチャーのなかで受け継がれ」(金水 2014: 195)、ステレオタイプ化された言葉づかいとして発信されてきた。そしてこうしたコメディ番組を見たとりわけ移民との接点が少ない視聴者が、番組で描かれる「トルコ系移民」像をトルコ系移民らしいとして受容していると考えられる。こうした一連の流れが、移民背景を持つ者が話す言語の「模倣」へと繋がっていくのではないだろうか。

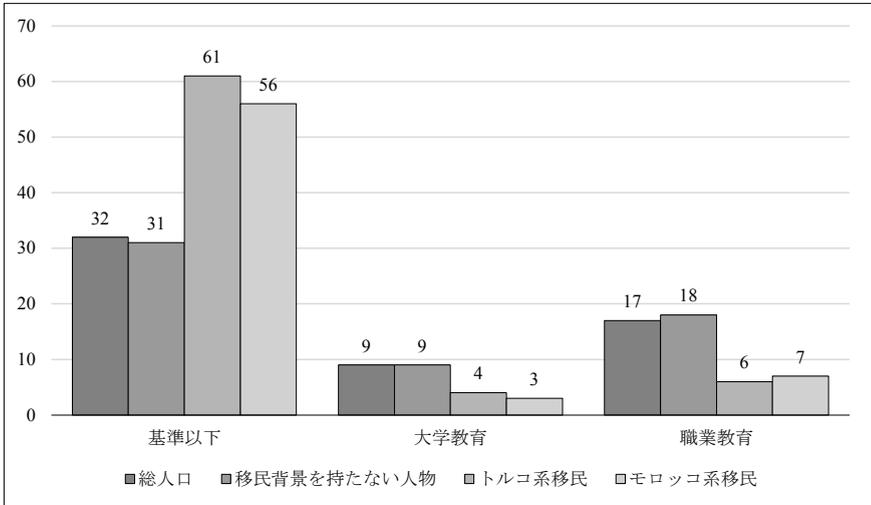
4.3. オランダにおける移民の教育水準

オランダにおいて移民背景を持つ者が話す言語が模倣される例を観察した際に、模倣される民族に偏りが見られた。トルコ系やモロッコ系といった民族である。では、なぜこれらの民族が話す言語が模倣されるのだろうか。

12) 「田舎ことば」という概念は、金水(2003)によるものである。金水はアメリカの奴隷解放以前の黒人奴隷が登場する物語上で、白人は教育があり支配する者として「標準語」を話し、黒人は教育なく支配される者として東北系の「田舎ことば」を話すとしている(同: 184ff.)。

ひとつの可能性として、彼らの教育水準に答えがあると考えられる。オランダにおいて模倣される対象である「トルコ系とモロッコ系移民の子供たちは、教育が低水準であるという背景がある」(Shewbridge/Kim/Wurzburg/Hostens 2010: 8)のだ。次の表 10 は、OECD (Organisation for Economic Co-operation and Development、経済協力開発機構) が発表したオランダにおける教育水準を示している。対象の年齢は 15 歳から 64 歳の男女で、それぞれ被験者の教育水準が基準以下であるか、被験者が大学教育を受けているか、あるいは職業教育を受けているかでカテゴリーが分かれている。

表 10: オランダにおける教育水準の割合 (15-64 歳)
(Shewbridge/Kim/Wurzburg/Hostens 2010 を基に筆者作成)



左から、総人口における教育水準の割合、移民背景を持たない者の教育水準の割合、トルコ系移民の教育水準の割合、モロッコ系移民の教育水準の割合である。この表からも、オランダにおけるトルコ系移民とモロッコ系移民の教育水準の低さがうかがえる。

すなわち「役割語」について見たときに出たある特定の移民が「不完全な言語しか話せない」というイメージは、本論文で観察した欧州諸国において模倣される移民の言語にも適応できると、筆者は考える。

5. 結論

以上のように、まず、都市部に生活する移民背景を持たない若者から、同じ地区で暮らす移民背景を持つ者の言語が受容されつつあり、日常生活で使用されているということが分かった。彼らは普通の生活で移民背景を持つ者と直接的に接触をすることにより、移民背景を持つ者が話す言語を習得し、自分を示すためのアイデンティティとして使用している。それは対地域的に見て自らの出身地をあらわすためのアイデンティティであり、また対大人で見たときに、民族の垣根を超えた同じ若者としてのアイデンティティをあらわすためである。

しかし他方で、移民背景を持つ者と日常生活において接点のない、あるいは少ない若者も、移民背景を持つ者の言語を模倣することが分かった。だが移民背景を持つ者との関わりが少ないため、模倣する際の言語的特徴は極めて限定的である。どの言語的特徴もステレオタイプ化された表現で、模倣する者の、移民背景を持つ者に対する知識の乏しさがうかがえる。模倣の目的は様々であるが、主に移民が持つ「タフさ」や「攻撃性」を演出するためという傾向が強い。しかし移民のことを面白おかしく描写したり、人種差別のために同言語を模倣するという事例も観察された。その背景には、「不完全な言語しか話すことのできない移民」という、移民背景を持たない者の移民に対する意識が隠れている。

このように、同じ移民背景を持たない若者のあいだでも、移民背景を持つ者に対する評価の仕方に二重性があることが明らかとなった。

参考文献

- Aarsæther, Finn (2010): The Use of Multiethnic Youth Language in Oslo. In: Quist, Pia/Svendsen, Bente Ailin (Hg.): *Multilingual Urban Scandinavia. New Linguistic Practices*. Bristol/Buffalo/Toronto: Multilingual Matters, S. 111-126.
- Amt für Statistik Berlin-Brandenburg (2014): *Statistischer Bericht*. Potsdam.
- Androutsopoulos, Jannis (2001): „Ultra korregd Alder!“ Zur medialen Stilisierung und Popularisierung von ‚Türkendeutsch‘. In: *Deutsche Sprache 4/2001*, S. 321-339.
- Clyne, Michael (2000): Lingua Franca and ethnolects in Europe and beyond. In: Ammon, Ulrich/Mattheier, Klaus/Nelde, Peter (Hg.): *Sociolinguistica. Internationales Jahrbuch für Europäische Soziolinguistik. Band 14: Die Zukunft der europäischen Soziolinguistik*. Tübingen: Niemeyer, S. 83-89.
- Fox, Sue/Khan, Arfaan/Torgersen, Eivind (2011): The emergence and diffusion of Multicultural English. In: Kern, Friederike/Selting, Margret (Hg.): *Ethnic Styles of Speaking in European Metropolitan Areas (Studies in Language Variation. Volume 8)*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing, S. 19-44.
- Hill, Jane H. (2001): Mock Spanish, Covert Racism, and the (Leaky) Boundary between Public and Private Spheres. In: Gal, Susan/ Woolard, Kathryn A. (Hg.): *Languages and Publics. The Making of Authority*. Manchester/Northampton: St. Jerome, S. 83–102.
- Källström, Roger (2011): Multiethnic youth language in reviews of the novel *Ett öga rött*. In: Källström, Roger/Lindberg, Inger (Hg.): *Young Urban Swedish. Variation and change in multilingual settings*. Gothenburg: University of Gothenburg, S. 125-148.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店。
- 金水敏 (2014) 『コレモ日本語アルカ？－異人のことばが生まれるとき』 岩波書店。
- Le Page, Robert Brock/Tabouret-Keller, Andrée (1985): *Acts of Identity. Creole-Based Approaches to Language and Ethnicity*. Cambridge/London/New York/New Rochelle/Melbourne/Sydney: Cambridge University Press.
- Nortier, Jacomine (2001): „Fawaka, what’s up?“ Language use among adolescents in Dutch mono-ethnic and ethnically mixed groups. In: Hvenekilde, Anne/Nortier, Jacomine (Hg.): *Meetings at the Crossroads. Studies of Multilingualism and*

- Multiculturalism in Oslo and Utrecht*. Oslo: Novus Forlag, S. 61-73.
- Quist, Pia (2008): Sociolinguistic approaches to multiethnolect: Language variety and stylistic practice. In: *International Journal of Bilingualism. Volume 12*, S. 43-61.
- Rampton, Ben (1995): *Crossing. Language and Ethnicity among Adolescents*. London: Longman.
- Shewbridge, Claire/Kim, Moonhee/Wurzburg, Gregory/Hostens, Gaby Hostens (2010): *OECD Reviews of Migrant Education. Netherlands*. OECD.
- Statistik om Stockholm. (<http://www.statistikomstockholm.se>) 2015 年 12 月 1 日閲覧.
- Stroud, Christopher (2004): Rinkeby Swedish and semilingualism in language ideological debates: a Bourdieuan perspective. In: *Journal of Sociolinguistics* 8, S. 196-214.
- 田中翔太 (2012) 「民族性を脱したトルコ系移民のドイツ語—その認知過程における言語学者とメディアの役割をめぐって—」 [『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 16 号、81-103 頁].
- 田中翔太 (2013) 「ドイツの TV メディアにおけるトルコ系移民のドイツ語—『役割語』としての新たな研究の可能性—」 [『人文』第 11 号、学習院大学人文科学研究所、125-142 頁].
- Wiese, Heike (2006): „Ich mach dich Messer“: Grammatische Produktivität in Kiez-Sprache („Kanak Sprak“). In: Grewendorf, Günther/von Stechow, Arnim (Hg.): *Linguistische Berichte Heft 207*. Hamburg: Helmut Buske Verlag, S. 245-273.
- Wiese, Heike (2012): *Kiezdeutsch. Ein neuer Dialekt entsteht*. München: C.H.Beck.

(たなか・しょうた 日本学術振興会特別研究員・
学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師)

Die Sprache der Menschen mit Migrationshintergrund in den gegenwärtigen europäischen Ländern

Die Dualität ihrer Bewertung

Shota Tanaka

Das Deutsch der türkischstämmigen Migranten, das in den 1960er Jahren von der deutschen Gesellschaft oft als „gebrochenes Deutsch“ problematisch angesehen wurde, wird seit Mitte der 1990er Jahre zum Teil von Jugendlichen ohne Migrationshintergrund als „coole Sprache“ positiv bewertet und gesprochen. Laut Wiese (2006) ist dies jedoch „kein isoliertes deutsches Phänomen“, sondern man kann es seit den letzten Jahrzehnten auch europaweit in urbanen Stadtvierteln mit hohem Migrantenanteil betrachten. Die Sprache, die eigentlich von Menschen mit Migrationshintergrund in europäischen Städten gesprochen wird, wird mehr und mehr auch von Menschen ohne Migrationshintergrund gesprochen.

In der vorliegenden Arbeit soll versucht werden, aufgrund der These von Wiese (2006), folgende zwei Fragestellungen aufzuklären: 1. Von welcher Sozialgruppe der Menschen ohne Migrationshintergrund wird die Sprache der Menschen mit Migrationshintergrund in europäischen Städten gesprochen und was ist ihr Ziel? 2. Wie bewerten Menschen ohne Migrationshintergrund, die die Sprache der Menschen mit Migrationshintergrund sprechen, diese Sprache und aus welchem Grund geben sie solche Bewertungen? Bestimmte sprachliche Phänomene werden unter der Perspektive der 1) Sprecher, des 2) Ortes, der 3) sprachlichen Merkmale und des 4) Ziels der Sprecher analysiert.

Bei der Betrachtung der betreffenden sprachlichen Phänomene in Europa waren zwei unterschiedliche Dimensionen zu finden, wie die Menschen ohne Migrationshintergrund die Sprache der Menschen mit Migrationshintergrund verwenden und welche Motivation dafür ausschlaggebend ist.

Erstens wird die Sprache, die von Menschen mit Migrationshintergrund in Städten Europas gesprochen wird, von Jugendlichen ohne Migrationshintergrund aus derselben Stadt akzeptiert und im Alltag gesprochen, u.a. „Straattaal (Straßensprache)“ in Amsterdam (Niederlande), „Kebabnorsk (Kebab Norwegisch)“ in Oslo (Norwegen), „Rinkebysvenska (Rinkeby Schwedisch)“ in Rinkeby (Schweden), „Københavnsk multietnolekt (Kopenhagener Multiethnolekt)“ in Kopenhagen (Dänemark) und „Multicultural English (Multikulturelles Englisch)“ in London und Birmingham (Großbritannien). Die genannten sprachlichen Phänomene beinhalten in Bezug auf die Sprecher einige Gemeinsamkeiten. Alle erwähnte Sprachen werden von Jugendlichen ohne Migrationshintergrund gesprochen, die in Städten leben, in denen der Anteil der Menschen mit Migrationshintergrund hoch ist. Durch einen direkten Kontakt mit Menschen mit Migrationshintergrund im Alltag erlernen sie deren Sprache und verwenden sie als Identitätsmarker für sich, die einerseits gegenüber anderen Milieus und andererseits gegenüber Erwachsenen funktionieren.

Zweitens wird die Sprache der Menschen mit Migrationshintergrund von Jugendlichen ohne Migrationshintergrund nachgeahmt, die im Alltag wenig bis kaum Kontakt mit ihnen haben, u.a. „Murks (Marokkanisch-Türkisch)“ in Utrecht (Niederlande) und „Mock Rinkeby Swedish (Nachgeahmtes Rinkeby Schwedisch)“, wobei die Kenntnisse solcher Jugendlichen über die eigentliche Sprache der Menschen mit Migrationshintergrund gering sind, weshalb sie nur beschränkte stereotypisierte sprachliche Merkmale, wie z.B. übertriebene Intonationen oder Aussprache, oder für Menschen mit Migrationshintergrund typische Wortschätze, verwenden können. Das Ziel der Nachahmung ist u.a., das Image der Menschen mit Migrationshintergrund darzustellen, das mit „toughness“ oder „Aggressivität“ zu tun hat. Jedoch war es zu sehen, dass diese Sprachen auch aus parodistischen oder gar rassistischen Gründen nachgeahmt werden. Dafür ist der Hintergrund das Image, dass Menschen mit Migrationshintergrund nur mangelhaft die Sprache beherrschen können.

Als Fazit lässt sich feststellen, dass bei Jugendlichen ohne Migrationshintergrund, die die Sprache der Menschen mit Migrationshintergrund verwenden, eine Dualität der Bewertung existiert.